

---

# たとえ違う外史を刻もうとも 雪蓮編

不知火仁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たとえ違う外史を刻もうとも 雪蓮編

### 【Nコード】

N9764K

### 【作者名】

不知火仁

### 【あらすじ】

真・恋姫？無双の短編です。一刀×雪蓮のカップリングです。このタイトルでいくつか短編を書いていこうと思います。ちなみに一刀はオリという設定にしています

(前書き)

純愛系の短編です。今回は一刀×雪蓮です。

真・恋姫無双

「たとえ違う外史を刻もうとも」

今思うとアレはとても不思議なものだったと思う。

俺、北郷一刀は呉の城の庭でふと思った。

そう、アレは俺たちが袁術からこの土地から奪い返しその後には曹操が攻めてきたとき。

その直前俺は英雄孫策と彼女の母の墓で彼女の思いを聞いた。

「……だから一刀、私は母様の目指した孫呉の夢を」

俺はその時本当に孫策、雪蓮の本当の思いいや、夢を心から叶えてやりたいと思った。

「……そうだな……？」

俺は何かの気配を感じその気配の先、茂みの向こうを見た。その時だった。

「雪蓮！」

俺はとつさに動いた。本能よりも身体が先に動いていた。

こちらに飛んできた何か、いや、俺の目はそれを捉えていた。矢だった。

俺はそれを目前で手刀で矢を落とした。

それを目の当たりにしたのか茂みの奥に隠れていた伏兵はまた弓を構えこちらに狙いを定めていた。

「させるか！」

俺は裾に隠してあったナイフを投げそれは見事兵士の首を刎ねた。

「一刀！大丈夫！？」

雪蓮はいつのまにか剣を抜いて俺のそばにやってきた。

「それは俺の台詞・・・！」

その時敵はもう撤退しているだろうとなんの根拠があつてかそう思つていた。だが、敵兵たちはその逆で俺達殺しにかかつてきた。先ほどをと同じく弓を構え俺たちの方に矢を放つた。

俺は、雪蓮の持つていた剣を強引に奪い降り注ぐ矢の雨から雪蓮を守つた。

その矢があからさまにどこかに飛んでいくのではなく俺たちに狙いを定めていたのが不幸中の幸いで俺はなんとか彼女を守ることができた。  
だが

「ぐっ！」

その時右足に激痛が走つた。矢が刺さつたのだ。

「一刀！？」

俺は雪蓮の言葉を無視し目の前に集中していた。敵は弓をすて、剣をとってこちらに向かつてきた。人数は三人。

「一刀私の剣を！」

俺はまた彼女の言葉を無視した。俺は、先ほど投げたナイフ、（その握るところの下にワイヤーが付けてある）を戻しこちらに戻ってきたナイフを掴み取り一番左端にいるやつに向けて投げた。その目前で俺は腕を右側に降った。ナイフもまたその動作の動きをした。そして左端の兵から首を刎ねそして真ん中の兵と最後の一人というところでその兵は反射神経がよかったのか剣ではじいた。

「ふん、こんなもので・・・！」

その瞬間左にも隠してあったナイフをまっすぐなげ奴の首を刎ねた。男は何が起きたかもわからず死んだ。

「うっ！」

俺は安堵したのか一気に全身から力が抜けた。そんな俺の姿みた雪蓮は俺の身体を起こした。

「馬鹿、私だつて自分の身ぐらい守れるわよ」

「あははっ、なんかついつい身体が、な。それに万が一にお前に傷をつけたら冥琳や皆に俺が怒られるからな、別の意味で」

「・・・私なんかよりあなたのが大事よ、一刀。あなたは私たちにとつて大事な存在なのよ」

その時の雪蓮の顔は今までに見たことのない顔だった。アレは本人には悪いがその時の彼女の顔は本当に可愛かった。

けど、彼女は涙を流していた。いや、目が潤んでいた。

その時だった。蓮華が血相かかえて走ってきた。

「姉さま大変です。魏が、曹操が攻めて・・・一刀いつたいどうしたの!？」

まあ誰もがみたらそう思うだろう。

「蓮華・・・聞いただけろう雪蓮、戻るんだ」

「わかってるわ、でもあなたも一緒に」

「駄目だ。兵たちは君を孫伯符を待っているんだ。一刻も早く城に戻るんだ」

「でも・・・」

「この呉をやつと袁術から取り戻したこの呉を守らなきゃいけない義務がそなたにはあるのだぞ孫伯符!」

たぶんそれが初めて彼女を叱ったときでもある。

「一刀・・・」

「それに俺は足手まといだ。たぶん毒が塗られてたんだ。俺としたことがドジをふんだぜ」

「なら尚更!」

一刀そういいながら止血をし、血が回らないよう布で縛っていた。

「大丈夫だ。こういう時の場合も備えて解毒剤を携帯していたんだ。大丈夫、天の技術は凄いだぞ」

二人は彼の言葉を信じたのかそれ以上なにも言わなかった。

「それと二人が戻ったら兵を何人か連れてきてくれ。さすがに歩け

ん

「わかったわ、でも戻ってきたら死んでたなんてことは絶対認めないから」

「ああ」

俺は相槌をうつと二人は城に向かい走って行った。

二人が視界からいなくなるのを確認すると彼は近くの木に寄りかかっていた。

「二人にはあんなこと言っただけ、解毒剤をもっていてその毒の成分がわかってなきゃ意味ないんだよな」

彼はコートの胸辺りを探り小さな箱を取り出しふたを開けた。そこには長細い円柱型の注射があった。

彼は一つをとりだし口にくわえ腕をまくり注射した。

「っー」

少し痛みが走った。

彼は注射器を箱に戻ししまった。

「あとは俺の体力と天の力を信じるしかない……か」

「はああ……ホント運がねえ。……くたばったって天国には逝けやしないんだ」

やばい本当にやばい。視界が揺らいできた。

「そう……いえば雪蓮のやつ泣きそうになってたな。俺のために泣いてくれたのかな？」



俺のために泣いてくれる・・・そんな人いなかったからな。

「けどホント・・・や・・・ばい・・・」

そして俺の意識は途絶えた。

そして、俺は夢かあの世か不思議なものを見た。

それは俺らしい人物と雪蓮が今さっきいた場所において雪蓮に俺がかかった毒矢にかかっていたというものだった。その後彼女の声に呉の兵士たちは死兵となり魏をしりぞけた。

しかし、孫策は死に俺は生きているものだった。

そのとき俺は思った。これは別の世界の話、もしも俺が助けてなかったという世界。

けど、そんな世界はいらない。

俺は今いるこの世界が好きなんだから。

「・・・ず・・・と」

誰だ。俺をよんでるのは。

目を開けたくても開けられない。

「か・・・ずと」

なんで俺の名前を呼ぶんだ？

「一刀！」

「！」

なんでか俺は夢から覚めた。

「あれ、俺・・・生きて・・・」

その後、俺は目を覚まし皆に色々怒られたのだ。病人なのに。

「あつ！かゝずうくと」

どこから聞きなれた声がする声の主の方向に身体を向けるとそれは雪蓮だった。

「何してるの一刀？」

「別にただ、思い出してたんだ。あの時のことを思い出してただけ」

「あの時？」

雪蓮は当然のように聞いてきた。

「俺が雪蓮のかわりに毒矢を受けたあのときのこと」

「だって一刀つたら私は平気なのに代わりに庇おうとして自滅して  
るんだもん」

「はいはい」

俺が彼女の代わりにかばったというと皆今のように言っただ。  
まあ何人かは否定してくれたけど。

「でもな雪蓮、俺はお前を守れてうれしいよ」

「どうして？」

「だって、お前が生きてることが俺の幸せだからな」

「それ本当？」

「当たり前だろう。俺はお前を・・・」

彼はそれ以上言わなかった。

私ももうこれ以上言わなくてもわかっていた。  
けど これだけはいわせて。

「一刀・・・」

「？」

「ありがとう」

あの時のことをふくめあなたのすべてにありがとう。

そして、二人は互いの唇を重ねあいお互いの愛を受け止めた。

あの時・・・たとえ違う外史を刻むことになったとしても

・・・俺は今の君だから君を愛せる

だから俺は君を愛した

だから私はあなたを好きになった

(後書き)

今後タイトルとは関係のないカップリングを作ると思います。短編は初めてなので感想などをいただけるうれしいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9764k/>

---

たとえ違う外史を刻もうとも 雪蓮編

2010年10月9日03時09分発行